

平尾雅子門下生  
ヴィオラ・ダ・ガンバ発表会

2025年11月30日（日）13：30開演  
於：今井館 聖書講堂

# 第 1 部

## 1. マレ：2つのメヌエット（第5巻、組曲ト長調より）

M. Marais (1656-1728) : Deux menuets dans suite en sol majeur

青木良枝 (Vdg. 平尾雅子 Cem. 辛川太一)

マレのヴィオル曲集の5巻に収録されている曲です。最近のレッスンでメヌエットに取り組んでおり、今回はその集大成のつもりで、苦手なフレーズ感を出せるように頑張ります。（青木）

## 2. マレ：組曲 イ短調（第5巻より）

M. Marais : Suite en la mineur

Prélude le Soligny / Allemande la Facile / Sarabande / La Mariée / Gavotte / Menuet / Double

山田郁子 (Vdg. 宅間かおり Cem. 辛川太一)

マラン・マレの作品は優雅で華やかで、私には敷居が高いと思ってきました。ですが、前回の発表会でサント=コロンブを弾いて彼の弟子だったマレの作品を弾いてみたくなり、マレの晩年 1725 年に出版された第5巻の作品の中からイ短調の曲を数曲選びました。4曲目の La Mariée は「花嫁」という意味をもつ言葉です。新しい生活を控えている花嫁の心境を表しているのかなと思う曲です。どんな花嫁なんだろう？と想像しながら練習する時もありました。それぞれの曲にキャラクターがあるので、違いを明確に弾きたいと思います。（山田）

## 3. マレ：組曲 ニ長調（第3巻より）

M. Marais : Suite en ré majeur

Prélude / Sarabande / Rondeau / Plainte

松田祥子 (Vdg. 山根健一 Cem. 辛川太一)

かねてからプレリュードをはじめとするゆっくりとしたテンポの曲を苦手にしておりましたが、今年はそのコンプレックスを克服したく、あえてゆっくりめの曲目を多めに選びました。マレの中でもよく知られている組曲なのでプレッシャーですが、気持ちのよい朝のまどろみのようなプレリュードから、穏やかであたたかいサラバンド、心浮き立つ舞踏会のようなロンドー、そして夕暮れの中、過去への哀惜と未来への希望を感じるようなプラントまで、美しい曲たちに寄り添ってもらって演奏したいと思います。（松田）

## 4. マレ：組曲 ニ長調（第4巻より）

M. Marais : Suite en ré majeur

Prélude / Rondeau le Gracieux

池部裕子 (Vdg. 堀あゆみ Cem. 加納文子)

プレリュードは、緩急の二つの部分から成り立っています。始めの「緩」部分は、微妙なニュアンス満載で、音楽作りに悩まされています。原稿を書いている時点ではまだ明確なイメージが定まっていないのですが、何かとてもとても美しい神秘的な自然を感じます。続く「急」部分は、明るく軽やかな3拍子。エレガントに弾くべし。Rondeau le Gracieux（優雅なロンド）は、昨年7月の平尾先生の演奏を聴き感動し、選曲しました。長調なのに、なにか物悲しさや懐かしさも感じられる・・。昔の日本人は「悲し」「哀し」だけでなく「美し」「愛し」も「かなし」と読んだと言う、そんなことも思い起こされる美しへい曲です。（池部）

5. マレ：2つのヴィオルのための組曲 ニ短調（第1巻より）

M. Marais : Suite en ré mineur à deux violes  
Allemande / Courante / Sarabande

井上巴奈歌 井上樹

マレは1676年よりルイ14世の王室楽団員としてリュリのもとでキャリアを積み、10年後の1686年に最初の劇作品を発表したことで出版権を与えられ、同年に最初のヴィオル曲集を出版しました。この第1巻には、独奏または2つのヴィオルのための組曲が収められており、当初は上声パートのみが出版され、通奏低音のパート譜はその3年後に出版されました。

2つのヴィオルのための組曲は、2つのパートがほとんど対等に扱われ、重音も多く用いながらメロディとバスを交互に担当するように書かれています。そのため、通奏低音なしでも演奏可能です。マレはこの第1巻の序文で「自分の弾く通りに和音や装飾を書き込んだ」と記しており、特にサラバンドでは繰り返しの際の装飾やアーティキュレーションが細部まで書き込まれています。（巴奈歌）

6. マレ：組曲 ホ短調（第5巻）プレリュード、トリオ ホ短調 パッサカーユ

M. Marais : Prélude dans suite en mi mineur / Passacaille dans trio en mi mineur

森田彰子 (Rec. 山本多喜子 Rec. 大鶴扶美 Cem. 平山絢子)

パッサカリ（仏パッサカーユ）及びチャッコーナ（シャコンヌ）はオスティナート・バスに基づく3拍子の変奏曲です。フランスではパッサカーユは莊重な3拍子の器楽曲（舞曲）として多くの名曲があります。マレは、6つのトリオ全68曲に4つのパッサカーユを書いていますが、ヴィオル曲集5巻全596曲の中にはパッサカーユはただ一つ、2巻のホ短調にあります。当初、このパッサカーユを弾くつもりで、それを導くプレリュードを5巻から選んで演奏する準備をしてまいりました。しかし、この莊重な変奏を一人で弾くことが大変難しく、断念して、代わりに、同じホ短調のトリオ5番のパッサカーユを、リコーダーのお二人の協力を得て、演奏することとしました。（森田）

7. サント=コロンブ：トンボー（《2つのヴィオルのためのコンセール集》より）

J. de Sainte-Colombe (c.1658-1701) : Tombeau dans Concerts à deux violes esgales

山田郁子 森田彰子

全67曲から成るコンセール集の1曲で、「トンボー」というタイトルがついています。トンボーとは、フランス語で墓碑を意味する言葉で、亡くなった人を追悼する曲です。

哀惜、鐘、冥界への渡し守（カロン）の呼びかけ、涙、天上の喜び、楽園、と音楽が移り変わり、再び涙へ戻ります。とても美しい曲で、なかなか思うように弾けず挫けそうになった時もありましたが、平尾先生に励ましていただきながらレッスンを重ね、ここまで来ることができました。今日、プログラムに載せることができて、とても嬉しいです。（山田）

8. ラモー（ヘッセ編曲）：《アムールの驚き》より

J-P. Rameau (1683-1764, arr. L. C. Hesse 1716-1772) : Les Surprises de l'Amour  
Prélude gracieux / Gigue / Rondeau / Gavotte / Contredanse

渡辺マリ 内山哲 (Cem. 加納文子)

L. C. ヘッセはラモーと同時代のガンバ奏者で、作曲家でもありました。彼はラモーの4つのオペラ作品の中から、2台のバスガンバ用に編曲した小品を4冊の曲集にまとめました。その中から5曲を選びましたが、ヘッセ編曲版にはチェンバロパートがなく、今回はチェンバロパートに加わっていただく為、ヘッセ編曲版を参考にしながら私たちのヴァージョンを作り直しました。《魔法のリラ》《アドニスの誘惑》《シバリスの人々》《アナクレオン》のオペラ作品よりプレリュードと4つの舞曲です。ラモーの快活さ、メランコリー、ユーモア等のニュアンスを少しでも表現できたら良いと思います。（渡辺）

## 第2部

9. オルティス：6つのレチェルカータ

無伴奏 第3番／「ラ・スパニーヤ」 第2番、第3番／「甘い思い出」 第3番／  
テノーレ第2番、第8番

D. Ortiz (c. 1510-1570) : Sei Recercate Solo terza / La Spagna seconda e terza / Doulce memoire  
terza / Tenore seconda e ottava

宅間かおり (Vdg. 青木良枝 Cem. 辛川太一)

バロック以前の音楽と言えば、四線譜に四角い音符の乗った華やかな装飾の楽譜や、地方毎の様々なバグパイプ、ギターやヴァイオリンに似てるけど何かが決定的に違う正体不明の楽器達のイメージが強かった宅間です。しかしガンバを始めるにあたって、基本的な教則本と共に先生に勧められるまま なんの知識もなく変奏論を読み始め、レッスンの度に「え そうだったの??」と、愕然とする日々でした。この曲達からは定旋律に乗る装飾のフリをして、実は自由に主旋律を担っていくガンバの姿が垣間見えます。特に巻末に収録された9つのレチェルカータは生き生きとして古さを感じさせません。（宅間）

10. バッハ：ソナタ第1番 ト長調

J. S. Bach (1685-1750) : Sonate G-dur BWV1027  
Adagio / Allegro ma non tanto / Andante / Allegro moderato

橋直貴 (Cem. 平田恵)

ガンバ弾きにとって絶対に避けて通ることができないバッハのソナタに挑戦します。この作品はバッハが1717年から23年のケーテン公国宮廷楽長だった時代の作品とされていましたが、最近の研究ではその後のライプツィヒ時代に書かれたのではないかという説が有力だとのことです。アンナ・マグダレーナ・ヴィルケと結婚したこのケーテン時代に器楽作品の名作が数多く生まれます。特に鍵盤楽器を旋律楽器の伴奏から発展させて対等に対話する様式を確立したバッハですが、領主レオポルドがガンバをよく嗜み、宮廷楽団にもアーベルなどガンバ奏者の名手がいたこと、これらの理由からこの作品はこれまでケーテン時代に書かれたとされてきたのではないでしょうか？眞実はいかに？今回も学ぶことが多過ぎて、テクニックも音楽性もそれについていかなくてもどかしい時間も沢山過ごしましたが、能弁に語るような演奏を心がけたいと思います。（橋）

11. アーベル：ヴィオラ・ダ・ガンバと通奏低音のためのソナタ ト長調  
C. F. Abel (1723-1787) : Sonate für Viola da Gamba und Basso AbelWV B87  
Adagio / Allegro / Vivace

堀あゆみ (Cem. 加納文子)

アーベルのこのソナタ集は、2015 年にドイツ、オスナブリュックのレーデンブルク城に眠っていた個人所蔵品から偶然発見されました。《レーデンブルク・ソナタ》と呼ばれる 3 曲組の曲集より、本日はト長調を演奏致します。この 3 曲は、アーベルの他のソナタにはあまり見られない緩-急-急という楽章構成で書かれています。作曲年代は特定されていませんが、アーベルが 20 代の頃にドイツ圏で大変好まれた、感情や音量の突然の変化が特徴的な、多感様式とも思われる表現を多く取り入れている事から、この曲集はアーベルが比較的若い時代の作品なのかもしれません。（堀）

12. マレ：組曲 ト長調（第 5 卷より）

M. Marais : Suite en sol majeur  
Prélude / Gigue la pointilleuse / Rondeau le Troilleur / Le Jeu du Volant / Chaconne

山根健一 (Vdg. 市川雅敏 Cem. 辛川太一)

マレによるト長調の組曲から 5 曲を演奏します。1725 年に出版されたヴィオル組曲集第 5 卷に収められており丁度 300 年前に出版された曲になります。当時のフランスは太陽王ルイ 14 世の治世が終わりルイ 15 世の治世が開始された直後で、ルイ 14 世による華やかな王室文化の反面残された国家の莫大な借金の解消のため苦労していたようです。

さて、本作品のいくつかには副題がついています。おおむね、pointilleuse は几帳面、troilleur は怖がり、jeu du volant は当時流行していたバドミントンに似たスポーツのことのようです。特に troilleur については意味に様々な解釈があり、「狩り」や「ブドウ踏み」という意味もあるようですが、今回は舞踏会で狩りをするように華麗なステップを踏みながら会場中を踊り回る可憐な貴婦人をイメージして演奏したいと思います。（山根）

13. マレ：組曲 ホ短調（第 5 卷より）

M. Marais : Suite en mi mineur  
Prélude / Allemande la Beuron / Sarabande / La Caprice Bellemont / Suitte

藤崎広大 (Vdg. 池部裕子 Cem. 辛川太一)

膀胱結石手術図で有名なホ短調の組曲ですが、今回はそれ以外の曲から 5 曲を抜粋して演奏します。1 曲目のプレリュードは語りかけるかのような音形で始まる物悲しい雰囲気の 1 曲です。2 曲目のアルマンドは Fort と Doux が細かく指示されていて音が立体的に聞こえてくるかのような工夫が見られます。3 曲目のサラバンドは優美な旋律で始まりますが、所々重音やフラットマンにより拍が強調されて重々しく莊厳なサラバンドが顔を出します。4 曲目のカプリスは主題がコロコロと調を変えて登場する、いかにも気まぐれな雰囲気の技巧的な曲です。5 曲目は本来、膀胱結石手術図の後に演奏される曲で手術の成功を祝うかのような明るくて軽いジグになっています。（藤崎）

14. マレ：組曲 ホ長調（第2巻より）

M. Marais : Suite en mi majeur

Prélude / Pavane selon le goût des anciens compositeurs de luth / Rondeau irrégulier

市川雅敏 (Vdg. 山根健一 Cem. 辛川太一)

第2巻の後半、ホ短調のサント＝コロンブ氏のトンボー、フーガの後に、一転して明るく雅なホ長調の組曲が続きます。今日は、前奏曲、昔のリュート作曲家の様式（趣味）によるパヴァーヌ、風変わり（不規則）なロンドー、の3曲を演奏します。2曲目の「昔のリュート作曲家」とは、17世紀フランス・バロックのリュート奏者・作曲家であった、ゴーティエ、デュフォー、ガロ、ムートン等を指すのでしょう。彼らの作品に、パヴァーヌやアルマンドを基とする、トンボーの名作が多数あります。マレのパヴァーヌは、バロック期最後のパヴァーヌであり、フランス・バロック音楽の基盤を築いた先人達への敬意を込めた、リュリとサント＝コロンブに続くもう一つのトンボーのようにも思われます。その後時を経て、近代フランス音楽のフォーレやラベルのパヴァーヌに続くのかもしれません。（市川）

15. マレ：組曲 イ短調（第3巻より）

M. Marais : Suite en la mineur

Prélude / Allemande / Courante / Sarabande / Grand Ballet

米山水浦 (Vdg. 井上巴奈歌 Cem. 平田恵)

今までの経験上、組曲は Prélude から始まると思い込んでいましたが、この組曲は Fantaisie から始まり、Allemande、Courante と続き、Prélude は 11曲目まで出てきません。そして Prélude の2曲後には壮大な Grand Ballet が待っています。深い悲しみの叫びから始まる Prélude。それに対し Grand Ballet はルイ14世を思わせる堂々としたフレーズから始まつたかと思うと、そのすぐ後には着飾った女性が華麗に踊って出てきます。このドラマチックな展開や、考え抜かれた曲順は、マレが3巻の冒頭で唱えた「美しい作品をふさわしい趣味で」と繋がるのではないでしょうか。曲が織りなす心の移り変わりを表現できると幸いです。（米山）